

ドイツの作家ミヒャエル・エンデの名作『モモ』（一九七三）に時間貯蓄銀行という不可思議な組織が登場する。人々に時間を貯蓄すれば幸福になれると宣伝して時間を収奪するが、人々は自由になる時間を喪失して余裕のない不幸な生活になる。そこに登場した主役のモモが時間貯蓄銀行の秘密を暴露し、搾取された時間の解放に成功するという物語である。

現在の情報技術は時間貯蓄銀行とは反対に、自由になる時間を提供してくれる時間供給銀行が氾濫している社会を実現している。通信販売は買物時間から解放してくれるし、様々な窓口業務のためにそれぞれの機関に向く必要もない。必要な情報も情報端末を操作するだけで一瞬にして入手できる時代である。

その影響もあり、労働時間は急速に減少してきた。日本の年間労働時間は一九六〇年代の二四〇〇時間から現在では一七〇〇時間と六〇年間で七〇〇時間も短縮している。単純に計算すれば、現在は毎週平均して三三時間労働であるが、一〇年後には半分の一五時間程度になると予測する経済学者も登場している。

モモが活躍する必要はなさそうな時代であるが、二種の問題が登場してきた。第一は情報技術自体が自由な時間の収奪競争をしていることである。二〇〇七年にアメリカの識者ブレット・スワンソンが「エクサフラッド時代の到来」という評論を発表した。フラッドは（情報）洪水、エクサは一〇の一八乗を意味する接辞である。

社会に氾濫する情報が年間エクサバイトになる時代が到来するという予測であったが、現実には大幅に上回り、最近ではエクサより三桁増加した二乗を意味するゼッタバイト時代に突入している。これは日本の国会図書館の全蔵書数の約四億倍に相当し、人間一人が寝食を放棄して読破しても一六〇兆年は必要という分量である。

当然、人力で処理できる限界ははるかに突破しているから、検索技術さらには人工知能を駆使して必要な情報を入力することになるが、その過程はブラックボックスであり、多数の人々を意図して誘導するような操作が介入する余地がある。情報技術が提供した自由時間を情報技術が収奪しあう社会が進展している。

第二の問題は個人情報少数の組織に吸収されていく社会の登場である。情報技術により自由時間を提供された世界の人々はグーグルに一日六〇億回もアクセスしている。それを背景に、グーグルの会長であったエリック・シュミットは「あなたが関心のある内容はほぼ把握している」と発言しているが、それは現実である。

『モモ』に登場する時間貯蓄銀行は人々から時間を収奪することが目的であったが、GAF Aに代表される現代の時間供給銀行は人々の行動や思考を収奪することを目的としている。アマゾンなどで生活する、グーグルなしで調査する、フェイスブックなしで交流することが困難な人々は劇的に増加している。

『モモ』の発想は、ドイツの経済学者シルビオ・ゲゼルが『自然経済秩序』（一九一四）で提案したマイナス利子を付加する通貨が背景にある。所有するだけで利子が加算される通貨が格差の原因であるとし、その対策としての提案である。現在、個人情報の帰属が議論されているが、ゲゼルの参考に時間供給銀行による収集自体を規制する仕組の検討が必要である。